

第8回「やまだ塾」

昨日4日午後、第8回「やまだ塾」を八尾で開催した。いつもの会場は「こども食堂」で賑わっていた。早めに行って、ヴィーガンのミートソーススパゲティを食べた。大人は有料でワンコインだった。ミートの代わりに八尾産の枝豆によるもので、初めてヴィーガン料理を味わったが、南瓜のスープとともに美味しかった。

塾は奥の部屋で行ったが、ここから見る庭はまた風情があった。紅葉の頃が楽しみだ。いつものように、まず私から話題を提供した。前回からの動きとして、東京五輪・パラリンピックと新型コロナ感染拡大、大阪・関西万博、新大学キャンパスと森之宮の都市計画などを話した。参加者から要望のあった近代大阪と関一大阪市長について、『関一日記』の宮本憲一先生の「刊行のことば」を紹介した。

「関一は今日、大阪市の骨格をなしている港湾、パリを思わせる御堂筋などの道路網、地下鉄などの交通事業、電力事業、上下水道などを創設した。しかし、彼の偉大さは、このようなハードな社会資本をつくったというだけではない。ソフトな社会福祉や教育・文化行政を都市行政の中に位置づけたことであろう。関一が急逝した時に、大阪市民のなげきは深く、8万人をこえる空前の市民の参列による市葬がおこなわれた。関一の思想の独自性は、社会政策と都市政策（あるいは地方自治）を結合し、『都市社会政策』を構想したことにあるのではなかろうか。」

近代大阪の歴史と関一市長の業績から、大阪市民が学ぶことは多い。とりわけ10年余りにわたる維新政治により、関市長の時代に築かれた「遺産」が掘り崩され、それは教育の分野に象徴的に見られるのではないか。1928年に日本で初の市立大学、大阪商科大学を開校。関市長は国立大学のコピーではない、公立大学の誕生に尽力した。現在は大阪市立大学へと改編され、優秀な人材を世に送り出してきた。維新の「二重行政」批判により、大阪府立大学と統合・再編され、大阪公立大学として生まれ変わる。いまより規模は大きくなるが、大学は規模ではない。森之宮に新キャンパスがつくられるが、それを先導役として大規模な再開発が計画されている。

昨年12月の市議会で、大阪市立の高校22校を大阪府に移管することが維新などにより可決された。大阪市立高校は伝統的に、工業や商業など大阪経済にも大きな役割を果たしてきた。それを「二重行政」ということで切り捨てる暴挙である。しかも市立高校の土地・建物は無償で府に譲渡される。まさに大阪市民の財産ぼったくりだ。

横浜市で知的障がい者のガイドヘルパーの仕事をしていた参加者から、心に響く話題が提供された。外出したことの無い障がい者が、ヘルパーと一緒にラーメンを食べたりして興奮して、母親も喜んだという。ガイドヘルパーを最初に制度化したのは大阪市であり、この参加者は大阪市の福祉行政を評価して、大阪市廃止を阻止しようと住民投票に向けて活動を始めたという。「やまだ塾」参加者から学ぶことが多い。

(2021年9月5日)